人文科教育研究　22　1995年　pp. 223－230

古典への関心を育てる授業
――「和菓子の名前」から季節感に注目させる――

石塚　　修

1．はじめに

最近，古典の授業に以前より時間がかかるようになったという教室での声が，よく聞かれる。実際に授業をしている者の一人として，年々古典の授業に時間がかかってきているという実感は同様にある。では，このような状況はどうして生じてくるのであろうか。それは，おそらく生徒を取り巻く生活環境の変化に伴う，古典的素養の欠如が激しくなってきたことに原因があると考えられる。現代生活にあって，生徒自身がおかれている生活実感の基盤が，著しく古典の世界のそれと遠いものとなっているために，このような事態が生じているといえるのではなかろうか。たとえば，日本の伝統的民族衣装である「着物」について見ても，生徒自身はもとより，家庭の中でさえもその存在が認められなくなっているし，日本建築の各部なども，ほとんどの生徒が，その名称が理解できなくなっているものもある。筑波大学附属駒場中・高校生を対象として実施した「古典学習の前提となる素養調査(I)」では，中１で「長押」を知っている者，39.0%，「軒」を知っている者，53.6%であり，高２で「長押」を知っている者，37.8%，「軒」を知っている者，60.2%であった。また，着物についても，中１で「裾」55.2%，「褄」26.0%，高２でも，「裾」81.8%，「褄」26.0%という結果であった[1]。

生徒における，古典を読む上でのこうした素養の欠如によって，どうしても授業中に教師の側からその補足説明を余儀なくされ，その結果が授業時間の不足に影響を及ぼしているのである。具体的な例を考えてみると，高校１年生で，多くの教室で扱われている『伊勢物語』９段「東下り」の

　　からころもきつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞおもふ

の和歌を見ても，「褻れ」「褄」「張る」といった言葉への具体的なイメージが，生徒の体験の延長線にないため浮かんでこないと言えるわけである。

今回は，古典的素養として，まず第一に「季節感」を念頭に置いた。それよりも先の着物の名称といったことに重点を置いて授業をしてみるほうが，より欠如している古典的素養の獲得にとっては効果的ではないのかという見解もあろう。しかし，今回，「季節感」を取り上げ授業を展開しようとした理由は，入門期古典学習にあっては，やはり，後日の学習のためにも，広がりのある言葉を獲得させたいという点と，また，『古今和歌集』以来の伝統を受け継ぐ古典文学の中心となる世界の理解をさせたいという二つの点から，まず「季節感」に対する生徒の興味と関心を喚起させようと考えたためである。

たとえば，筑波大学附属駒場中・高校での，1994年の調査[2]から，中３～高１の400名中，「春」の季節を感じるものとして，10名以上が指摘した景物を挙げてみると，

桜・176　入学式・52　菜の花・22　梅・21　つくし・20　たんぽぽ・19

春休み・17　芽・13　蝶・13　雪解け・11　新入生・11　花見・10

ということになる。このデータからも，いかに現在の中・高校生が，古典文学理解のために不可欠である「季節感」から遠く，関心もないままの生活を送らざるをえない環境で生活することを余儀なくされているかを，垣間見ることができるであろう。そして，この実態に対して何の対応もなされないままに古典教育がなされて，はたしてよいのだろうか。何か，そうした実態に対する改善の方法はないものなのだろうか。

古典の授業が，それでなくとも「国語Ⅰ」の中で時間数のやり繰りが厳しく，学校五日制のあおりもあって，いっそう時間的なゆとりがなくなろうとしている中，なんとか生徒自身の中に古典的素養を育て，伝統的日本文化への開眼をすることができないものであろうか。そのような観点から，「季節感」に目を向けた今回の授業を試みた訳である。

２．授業の実際

今回の授業は中学３年生を対象として，古典の入門的段階において実施した。「日本人と季節」という単元名で，単元学習的発想によって授業計画を立ててみた。ここでは特に，この授業計画の中で，「私の季節感」として扱った「和菓子」の名前調査を基にした授業を取り上げ，その実践報告と検討を進めていくこととする。

〔単元名〕「日本人と季節」―春秋の争いを中心として―

「私の春秋優劣論」Ⅰ	作　文	１時間
『古事記』中巻　応神天皇記	「秋山の神と春山の神」	１時間
『万葉集』巻一　雑歌　　額田王	「冬ごもり春さり来れば」	１時間
『更級日記』	「資通との語らい」	３時間
	以上は小学館日本古典全集による	
「私の季節感」　和菓子の名前から		１時間
「春はあけぼの」　枕草子	「中学校　国語　三」　学校図書	２時間
『独ごと』　　上島鬼貫	「四季の月・四季の雨」	１時間
	復本一郎『鬼貫の「独ごと」』講談社学術文庫による	
「私の春秋優劣論」Ⅱ	作　文	１時間
		（全11時間）

〔「私の季節感」の授業〕

「私の季節感」についての授業は，以下のように進めた。

筑波大学附属駒場中学３年Ａ・Ｂ・Ｃ組男子122名に対して，つぎのような課題のプリントを配布し，期間を約１週間与えて，各自で調査させた上で，提出させた。課題を出すにあたっては，

『和菓子』（別冊淡交６号・淡交社・平成５，６）の写真を見せて，和菓子の色彩や形とその名前について関心を持たせるように配慮した。

ここで「和菓子」の名前を調べることが，なぜ「季節感」の認識につながると考えたのかといえば，後に挙げた生徒のコメントにもあるように，ハウス栽培の行き渡った現代にあって，野菜や果物といったものの調査では，およそ「季節感」を捉えることは不可能であろうと考えたためである。そんな中で，「和菓子」には，季節感を重視する茶道などの関わりから，まだ季節を意識しての名前が多いであろうと予想したからである。

中三　国語「日本人と季節」　　その二

（　　）組（　　）番（　　）

課題　「和菓子」の名前で，「秋」を感じさせる名前を探してみましょう。

自分で和菓子屋に出掛けてみるか，家族に聞いてみてもかまいません。

身のまわりの「秋」を見つけてみましょう。いくつかあったら，裏面に書いても結構です。

例　名前（春の雪）　　東京　世田谷区　　石塚堂　製

名前（　　）　菓子店名・所在地

調査方法　ア，自分で調べた。

イ，家族などに教えてもらった。（　　）から

ウ，その他

（　　）

この調査には，84名の回答があり，自分で調べた生徒50名。家族等から教えてもらった生徒16名であり，内訳は，父・２名，母・８名，祖母・１名，友人・２名，家族・２名，店の人・１名という数であった。その他としては，書籍・６名，テレビ・４名，広告・３名，知っていた・５名という情報源が認められた。

こうして，収集された和菓子の名前は実に次に挙げる71種類に及んだ。全て書き出してプリントし，生徒に配布した。

玉菊	みのり	里の秋	秋の山	高尾錦	萩の露	桔梗
雁来紅	萩の月※	神無月	月世界	月のかおり	山の彩	柿の種
秋の山路	菊の雨	姫菊	邑落※	柿の葉餅	いちょう	御用鮎
きせわた※	山路の菊	万月	月光	栗つつみ	稲穂	うさぎ
秋桜	唐錦※	山の幸	亥の子餅※	通天※	月見だんご	菊薯蕷
千代菊	里かぐら※	もみじ	月うねめ※	刈田の雁	紅葉襲※	初雁※
雲井の鶴※	銀杏物語	美愛ぐり	乱菊	落雁	籬の菊※	あけび※

菊重	十六夜※	名月餅	おちばたき	月のかおり	月の雫	栗まつり
熟柿	きざらし※	深山路※	仲秋の名月	爽頼柿	べにあづま	萩
栗時雨	ひなの菊	秋明菊※	一葉※	秋しぐれ※	かえで	栗まんじゅう
月夜峰						

さらに，※を付した語については，それぞれ次のような課題を与え，各自で調べさせ，提出させた。

萩の月	「萩」を詠んだ和歌を１首さがす。
邑落	どういう意味か。
きせわた	何のことか。
唐錦	どうして秋らしいのか。
亥の子餅	どういう餅なのか。
通天	どうして秋らしいのか。
里かぐら	どうして秋らしいのか。
月うねめ	「うねめ」とはどういう人か。
紅葉襲	「かさね」とは何か。
初雁	どういう鳥か。
雲井の鶴	「雲井」とはどういう意味か。
籬の菊	「まがき」の意味は何か。
あけび	どのような植物か。
十六夜	何と読むのか。
きざらし	何のことか。
深山路	どうして秋らしいのか。
秋明菊	どのような花か。
一葉	どうして秋らしいのか。
秋しぐれ	「しぐれ」とはどのような雨のことか。

加えて，「日本人は，秋という季節を，どのような景物からとらえようとしているか考えてみよう」という全体的な課題も与えた。

そして，これらの課題で調べてきたことを基として，それぞれの「和菓子」の名前について，どのような点が「秋」らしいのかを話し合いながら授業を進めた。名前の意味を考えながら，どのような景物が，「秋」らしいものとして日本人のなかに受け入れられているのかを理解することに中心をおいた訳である。このことは単元における他の教材との関わりの中で，伝統的な日本人の季節感と，文学の中で個性の発露となった季節感との理解にもつながると考えたのである。

たとえば，清少納言の「春はあけぼの」で，「からす」を取り上げて「秋」を捉えていることと，「雁」を取り上げて「秋」を捉えていることとが，いかに作者自身の創意と工夫によるものかを理解するためには，こうした「秋」と「雁」の伝統的な結びつきを知っておく必要がある。その上でないと，生徒には十分な理解はできないであろう。「秋」に「月」「雁」「紅葉」「菊」といった景物が，「和菓子」の名前として今日もなお多く取り上げられていることは，今日まで知らず知らず続いてきた，日本人の伝統的な季節感によると考えられる。その季節感の中に生徒自身も気が付かぬまま身を置いて過ごしているのである。「和菓子」の名前を調べることで，そのそれに気付かせることができただけでも，この授業の意義があったといえるのではなかろうか。以上が「私の季節感」の授業のおよその内容である。次に，この授業を通じて，生徒の季節感についての考え方がどのように変化したのかについて書かれた生徒のコメントを挙げる。

季節のうつりかわりにつれて変化する周囲の自然のようすを感じるということだけでもかなり多くのものがあるということを知った。それまで周囲の様子をなんとも思っていなかったが少しだけ気にとめる機会ができたような気さえもする。しかし，今，周囲を見ても，植物があるのは私有地だけで，土すら見つからなかった。月は学校帰りにたまにある，赤い色をした月が僕としてはよいと思う。

周囲に目が向くようになったたけでもすごい進歩だろう。　（A組　M・Y）

日常生活においては「季節に関することば」は大して意味もない形式上だけのものである，と思っていたものだが，古文を読むことで，それらが本当に昔から受け継がれてきているものだと実感でき，親近感を覚えることができた。

ただ，現代日本語では，当時の季節感をあらわすことができない。それほど古文は感情語がすぐれているということか。　（A組　Y・Y）

僕は，四季の変化（季節・自然など）にうとい（関心がない）ので，こういう授業は大変勉強になった。（よかった。）

こういうことは理科の分野のような気がしていたが，文学・歌などから国語として学ぶのは，意外な気がしたが，なかなかおもしろいとも思う。　（B組　T・T）

現代に生きる我々にとって，日常生活の中で季節を感じることは少ないと思う。家の中では冷暖房が大活躍していて，一年を通してほとんど同一の環境が保たれている。また，街を見回しても樹々が少なく，コンクリートで塗り固められている。ただでさえ自然は減り続けているというのに，私達は生活に追い回され，「季節を感じる余裕」が無いのだと思う。ところが，季節の授業を受けたことで季節に対する関心が深まり，「今日は満月だ。」と感じたり，道端に咲く花に興味を覚えたりするようになり，ただ知識を増や

しただけでなく，心にも余裕が出来た点が，一番良かった点だ。　（B組　K・T）

夏は冷房，冬は暖房の生活に慣れてしまい，あまり季節というものを感じていなかった。

最近では野菜などに旬というものがそれほど感じられなくなり，一年中食べられるものが増えていることも季節感をなくしているのではないかと思う。

この授業を通して，四季のある比較的温暖な恵まれた地域に自分たちがいることを改めて認識した。

昔の人たちが四季に関してうたったように，自分ももっと四季（季節感）を感じた生活を送ってみたいと思った。　（B組　A・T）

先人の豊かな季節感学ぶにつれて，それをうらやむと共に，季節感に恵まれない，あるいは鈍感になりがちな現代の我々がみじめに感じられて仕方ありません。

たしかに便利ではありますが「旬」を無視して一年中あまり変わらぬ商店の品ぞろえといったものがその代表例でしょうか。

一方，新たに季節感を見出だせるようになったのは，感性がとぎすまされたからでしょうか。自分の家の店先のお菓子から秋を感じるようになったのはついこの頃です。日比谷公園で菊花展を観賞する気持ちになったのも授業の影響があるのかもしれません。

伝統的日本の新たな一面を発見できたのはとても大きな収穫だったと思います。

（C組　Y・K）

季節感の授業というのは，最近，ビニルハウス栽培などで，季節感の狂っている僕らの常識を植えつける面でも，良かったと思います。そして，季節というものをとらえなおすことで，普段から周囲の自然に目を向けることもできるようになりました。

（C組　K・J）

季節を感じるのは，ビニル栽培などが普及して，年中同じ食べ物，植物などが出回っている今の世の中で，僕はほとんど皆無であったような気がする。そのような僕にとって，今回の授業は日本の四季を考えさせてくれる良い授業だったと同時に，昔の人々の季節に対する思い込みというのをしっかりと感じることができたような気がする。古文というのは自分からやろうとするには，なかなか入りづらいという印象が僕にはあったので，このような，自分たちにとって身近な話題から入ったのは，とても僕にとっては興味の湧くものであった。そして，一度見ただけでは何でもないような昔の人々の文章もよく読んでみると，いかに季節を文字として争い，また楽しんでいるかということを感じさせられ，とても衝撃的であった。

これからこういう機会は滅多にないかもしれないが，僕にとってかなり精神的に受ける影響が大きかったので，忘れないような気がする。　（C組　I・G）

3　おわりに

今回の授業の試みは，近年盛んに提唱されつつある「古典の授業の活性化」への一つの試みでもあった。渡辺雅之氏の「生徒の古典嫌いを作ってしまっているのは，一つには大学入試を意識するあまり，解釈中心の授業に偏ってしまっていることにあるように思える。もちろん解釈の授業を否定し去るつもりはないが，もう少し言葉の世界に逍遥するような授業が採り入れられてもよいのではなかろうか。古文の典雅な言葉，漢文の力感あふれる言葉など，表現そのものを取り上げる授業が工夫されてよいのではないか。」[3]という提唱や，藤井雅和氏の「例えば，装束とか，調度とか実物を見ることによって理解が進みますが，今までは国語便覧などで参考教材として写真を見せたり絵を見せる程度でした。それはあくまでも参考教材の枠の中だけですが，そうではなくて，そのものを学習の対象としてもいいと思うんです。つまり，平安時代の人々の生活，信仰はこうなんだ。調度や服装はこうなんだと。それだけで一時間の授業が組み立てられておもしろいと思うんです。今までの，こうならなければならない，こうあるべきだという指導法から離れて，指導者自身が楽しめる指導法を，これから先，是非開発していきたいですね。そうすれば古典教育も変わっていくと思います。」[4]といった主張とも，共通した新しい古典の授業観に立っての試みであったといえよう。

また，生徒のコメントの中にも出ていたが，「国語」という従来の教科としての固定観念に縛られず，「もの」と「名前」との結びつきに眼を向けた上で，調べさせることによって学習させていこうとする授業の展開は，ホール・ランゲージの「言語の形式よりも，その機能や意味を優先する。また，言語の学習は，スキルの学習ではなくして，人間の試行と結びつけて行なわれるべきであるという立場である。本書でもすでに言及したように，言語学者ハリディの『言語を，言語を通して，言語について』学ぶという考えを基本に据えている。道具としての言語と，内容としての言語を統合して行なうべきであるという考えである。言語はすべての教科の中心となり，必要に応じて，言語と社会科，言語と理科といったように統合してゆくべきであるという考え」[5]にも相通じると考える。

生徒のコメントからも読み取れるように，「季節感」あふれる「景物」の存在を知ることにより，生徒自身が，それまで認識しなかった日常生活の中にある「季節感」を改めて認識したり，遠くかけ離れた世界としてしか考えられなかった古典の世界を身近な世界として捉えられるようになったりしている。このことは，湊吉正氏の言われる「人間は，基本的に，生活世界への自己同化を通して自己を生かしていく存在であり，人間の個性とか創造性とかいわれるものも，そのような生活世界への自己同化のルートを経てはじめて生じてくるものであろう。人間の『学ぶ』という行為は，そのような生活世界への自己同化を直接の目標とした営みにほかならない。」[6]と

いう主張にみられる「生活世界」の拡大であり，それに伴う「読み」の世界の拡張にもつながったといえよう。

「和菓子」の名前を調べさせていく中で，生徒に「季節感」を理解させようとする授業の試みであったが，古典の入門期の授業の試みとして，成果はあったと考える。学区域が狭かったり，地方によって菓子店が限られていたりする場合，なかなか実践が難しいという問題点もあるかと思うけれども，その点は，京都などへ修学旅行に出掛けた時や夏休みなどの課題とすることで解決すると思う。生徒の日常の言語生活の中に，古典の世界への入り口を，自分の力で探させてやることこそが，古典の授業の活性化へと繋がっていくのではなかろうか。この授業を通して，少なくとも，そのことは明らかになったといえよう。

[注]

（1） 石井正巳ほか「中・高６ヶ年を見通した古典の教材編成」（その予備的調査１）筑波大学附属駒場中高等学校研究報告　第32集　1992，11，pp.9～33

（2） 石川祐爾ほか「中・高６ヶ年を見通した古典の教材編成」（その予備的調査２ならびに試行的実践１）筑波大学附属駒場中高等学校研究報告　第33集　1993，11，pp. 9～46

（3） 渡辺雅之「暗誦を採り入れた漢文入門」『国語展望』93　尚学図書　1993，10，p.9

（4） 金子　守ほか「古典指導をどう変えるか」『月刊国語教育』13－6　東京法令　1993，7，p.19

（5） 桑原　隆『ホール・ランゲージ』国土社　1992，5，pp.85～86

（6） 湊　吉正『国語教育新論』明治書院　昭和62，4，p.79